

村野次郎創刊

香 蘭



二〇二六年(令和八年)三月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

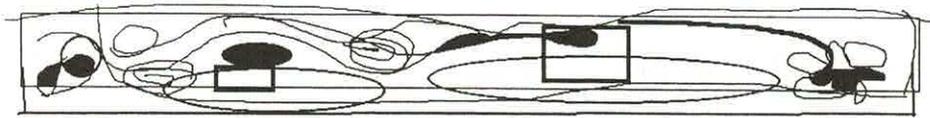
第一〇三卷第三号

2026年(令和8年)3月号

第103卷

第3号

通卷1143号



香 蘭

2026年(令和8年)3月号
第103巻 第3号 通巻1143号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(127)	森田 徹……………表二
招待作品 奇数月連載⑮ 笑い……………	加藤 英彦……………2
作品 一……………	4
二……………	24
三……………	30

推薦香蘭集

香 蘭 集

作品一 十首選(二月号)……………	桜井 京子……………16
-------------------	--------------

作品二・三 十首選(二月号)……………	高 島 憲子……………18
---------------------	---------------

村野次郎への旅(191) 昭和期の「香蘭」(二十六)……………	千々和 久幸……………20
---------------------------------	---------------

続・酔風船(27) 流行り歌に励まされて……………	千々和 久幸……………22
---------------------------	---------------

一頁公論(58) 思い出の旅……………	相 川 公 子……………23
---------------------	----------------

エッセイ・自由研究 携帯電話今昔……………	関 哲 行……………42
-----------------------	--------------

焦 点(一月号) Koran Method……………	田 中 あさひ……………44
----------------------------	----------------

作品評(二月号) 作品一……………	和 田 羊 子……………46
-------------------	----------------

作品二……………	小 原 裕 光……………48
----------	----------------

作品三……………	安 田 恵 子……………50
----------	----------------

香蘭集……………	中 村 陽 子……………52
----------	----------------

七 首 抄(二月号)……………	小 城 ・ 大 美 賀 ・ 坪 井 ・ 塩 田……………54
-----------------	--------------------------------

緑 地 帯……………	近 藤 光 子 ・ 内 宮 美 知 子……………56
------------	----------------------------

明宝研究会 第一七一回 十二月例会……………	小 笹 岐 美 子……………58
------------------------	------------------

『雀の卵』の枯淡と童謡の童心……………	小 笹 岐 美 子……………64
---------------------	------------------

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……………	小 笹 岐 美 子……………67
-------------------------	------------------

歌会及び会合・会員消息・他……………	72……………表三
--------------------	-----------

編集後記・新宿日記……………	72……………表三
----------------	-----------

表紙絵…………… 山口蓬春「柚子」……………	和 田 和 雄……………
------------------------	--------------

目次・緑地帯カット……………	和 田 和 雄……………
----------------	--------------

森田 徹

村野次郎作品 私の愛誦歌(127)

平凡に妻と生き来て老いんとす

この平凡を尊しとせむ

『明宝』

村野次郎師は昭和五十四年に永眠、行年八十五歳とある。星野丑三代表は、師を「古武士のきさき倅」と評されている。

上記の歌をはじめ「人間の匂ひ大方なくなりて枯葉のごとく老いてわが臥す」等の晩年の歌を読むと、一人の老人の姿が私にははつきりと見えてくる。師が車椅子に身を委ねる日常に変わられ、晩年の昭和五十三年の新作はわずかに十首となつてしまわれたこと等を知つた。

「花實」の長尾福子氏の「成すべきことを成し遂げた人が余刺を切り捨てて、寂寞の境地へ至り虚心坦懐を歩みつづけた道程を思わずにはいられない」との晩年の師への評もあつた。だが、私が晩年の師の歌から受ける思いは老人に迫つてくるひしひしとした寂しさである。

次郎師が増々、身近な存在と思えてきた。

『村野次郎全歌集』3336頁

笑 い

陰謀論がいくつか生まれ珍説はまことしやかな初ゆめの泡沫^{あわ}

暗がりにならずかに嗤う目をみたり いいや、だあれも笑っていない

耳もとにゆびを飛ばせとささやくは海のかなたの墮^{ルシフェル}天使のこえ

暴力のかくうつくしき世にとおく結束バンドとボール一挺

幾年をふぶくさくらぞ零落の千早ののぞく井戸のくらはさ

うすき膜を口中にのせ溶かしゆくあわく霜ふる豆腐屋のあさ

とわという女にかえる生国の川もたらちねの母もわすれて

紅葉なのではないあれは花魁の血しぶきのいろ だれも笑わぬ

拒みたる好色といえ一掬のめし拒まれて墮ちし浮き世か

保たれし面目の果てご隠居のむすびのオチにつづく一席

笑——字が笑っている。表情をもっているのだ。大きな口をあけた爆笑や大笑、親しい友人と交わす談笑、モノリザが世界にみせた微笑も、程度の差こそあれ「笑」の字にはどこか人の心を和ませる表情がある。

と思つた途端、口角を少し斜め右に上げた苦笑にはじまり、失笑、憫笑、映笑、嘲笑、冷笑、嗤笑などやや屈折した「笑」のほうが幾つも思いかぶ。その中にどこか蔑むような、何かをあざ笑うような「笑」が多いのはわたしたちの文化や歴史が暗く歪んでいるからだろう。いや、語尾に「笑」のつく字を探すからいけないのだ。まず最初に笑つてしまえば、「笑顔」だつて「笑窪」だつてポジティブなイメージはまだいくらもあるではないか。笑止、とだれかが嗤つた。

底ぬけに明るい「笑」などそう多くはないのが当たり前だ。俗語に明るいわけではないが、「ネクラ」ということが流行つた八〇年代と、七〇年代後半の連続幼女殺害事件（宮崎勤事件）の「オタク」批判はどこか重なり合いながら伝播したように思える。ネクラもオタクも否定的なレッテルとして流通し拡散した。「人はネアカだけで生きてはいない。本

当はみな暗いんだよ。そうでなければ文学なんてできない」とある結社の主宰が語つたのを覚えていて。表面的にはネアカを装つても、ひとりに戻ればみな自らの内部の暗さと向き合うのだという認識であつたようだ。二十代のわたしは領きながら、ネアカでもネクラでもそうした二元論のどちらかに回収しようとすること自体に問題はないのかと思つたものだ。そう、人間笑つているときに本当は一番哀しいのかもしれない。

微笑みを返しつつづけて日が暮れて今日もさびしい一日でした 松沢みどり

「笑」といえば古典落語に「千早振る」がある。「ちはやふる神代もきかず竜田川」のあの百人一首だ。八五郎に説明を求められたご隠居もじつは歌意を知らない。曰く、紅葉の名所「竜田川」は力士の四股名となり、「千早」は吉原の花魁の名、「神代」はその妹の女郎の名に変わった。嘶のなかで笑いは起きない。大笑するのは棧敷の客たちだ。

それは自らの無知を隠そうとしたご隠居の苦肉の珍説であり、愛すべき庶民性であつたようにわたしは思う。そんな短歌が一首くらゐあつても良いかも知れない。

四 選 者 の 作 品

明日は逢わんよ 平塚 千々和 久 幸

風すでに秋と思ひて歩み入る鬼灯ほおぼのような町の灯りに

まっ赤なる夕日を浴びてゆるゆると水平線に鳩が沈むよ

街路樹の枝払われて筒抜けに青空の見ゆ 明日は逢わんよ

「存立危機事態」かは知らね虎の尾を踏みたがる宰相がこの国に居て

円安だ利上げだ値上げだ賃上げだ 銭形平次も忙せわしからんに

紙臭きコーヒを飲み明日のこと考えている 雨まだ止まぬ

飽きもせて脣歌なんぞ詠み腐り今日のアリバイ残さんとせり

半生を徒勞のごとく生き延びて寒桜さく湯煙の先に

夢さめて 我孫子 丸山 三枝子

診断は頸椎症とぞ取りあえず首が回れば生きて行けます

椎間板の変形つまり老化現象 医師の説明単純明快

怒る前に悲しくなりてまたしても有耶無耶になる 椿が赤い

宇宙にも終わりはあるか人間の終わりは母に見尽くししかど

裸木となりたる樺名を掲げ墓標のように朝陽のなかに

坂道を加速度つけて下りゆく中学生となりたる太一

A4の紙がこぞりて押し寄せてくる夢さめて極月に入る
忘れても差し支えなきことなれど里の岩屋の水柱つちら忘れず

黄金の秋 東京 桜井 京子

川べりに紅葉したるは何の樹ぞメグスリノキとA1は言ふ

黄金わうごんの径となりたり警視庁第二機動隊の公孫樹の小径

花梨の実ひとつ落とせばアスファルトのうへに転がる黄金の秋

伝言板いまま残れる駅に来て通るたび見る いつか逢へるよ

改札で待つてゐるつて言つたよねあれは二十歳はたちの頃でありしが

ふるさとに去つてしまひし男友 あをき葡萄を送つて来たり

ひとりだけ笑つてゐない写真出づ社員旅行は五十年まへ

来年はどうしてゐるかなど思ひ手帳を買ひぬ年どしのこと

ハ グ 横浜 渡辺 礼比子

「なまけ癖つきて」と嘆く一句あり闘病中の父の句集に

手袋が落ちましたよと背うしより声かけられぬ昨日また今日

「認知症」などとは言わぬ婦人なれ「あの方おつむがぼんやりされて」

心根を曝して歌を詠む人を誉めつつわれを恥やましみにけり

婚の日に賜びし会津の塗碗を惜しみ下ろさず半世紀経つ

ヘアピンをもて耳掃除しておりし隣人を見き昭和の縁に

嬉々として電気工事の職人につき纏う元技術屋の夫

夕星のきらめく頃をボサノバのノリでハグして別れてきたる

作品一 十首選



(一月号作品から)

桜井京子 選

生きてりやあとこかで辻褃は合うものさ敗者復活戦はこの先

千々和久幸

この春、御年八十九歳を迎える作者。「辻褃が合う」とは、「細かい点まで食い違いがなく、筋道が通ること(「広辞苑」)である。上句は、山あり谷あり勝ったり負けたりしつつ、八十九年生きてきた作者の、これも一つの人生訓なのであろう。だが下句では、さらに敗者復活戦を期していると歌う。つまりは、まだ辻褃は合っており、この後の人生で欠落部分を取り返したいということか。

ビジネスマンとして高度成長期を生きぬき、歌人(詩人)としても孤軍奮闘・獅子奮迅の働きをして来た作者にして、いまだ意気盛んであることをこの歌は示している。とてもかなわんなあと、私などは思うのである。

・文化祭短歌大会二つ済みこうしてそうして一年が逝く

丸山三枝子

二〇二五年秋、丸山選者の「会員消息」によると、十月に我孫子市民文化祭短歌大会、十一月には習志野市民文化祭短歌大会で、いずれも講師を務めている。講師の依頼を受けてより、相当入念な準備

をして当日に臨まれたことだろう。大変有益なお話であったと、外部の出席者からも漏れ聞いている。

それらが終るとほっと一息つくのだが、気がついてみれば季節はもう秋が過ぎ、一年が過ぎようとしている。慌ただしくスケジュールに追われて過ぎてゆく日々の中、一瞬立ち止まり、この歌には充足感とかな悔恨も含まれていようか。たとえどのように過ぐそうと、過ぎてゆく時は誰にも止められない。

・耳鳴りかはたまた蟬の鳴き声かわからぬままに夕暮れとなる

飯島智恵子

耳の奥にあたかも旋盤が作動しているかのような耳鳴りに、私も長年悩まされているが、確かに蟬が啼いているようにも聞こえる。気にし始めるとひどく鬱陶しく感じられ、夕暮れまで来てしまったと作者は歌う。夕暮れは晩年であることとイメージが重なり、この音とこれからも付き合ってゆく他はないのだろう。

だが、人生には何もかもが鮮明に聞こえない方がいいことだってある。分からないなら分からないままで、年齢を重ねてそんなゆとりある生き方が出来る作者と思うのである。

・われの名の「義和」の「和」は平和の「和」と父に言はれき 遥かなるかな

市川 義和

作者の生まれは昭和二十年、終戦の年の秋であったと聞いている。多くの犠牲者を出した悲惨な戦争が終わり、人々はもう戦争は二度と御免だと、身に沁みて思ったことだろう。作者の父も平和を願って「和」の文字を我が子につけたのである。

結句の「遥かなるかな」は、付け足しのように見えるが、そうではない。戦後八十年が過ぎて、戦争が遥か昔となったと共に、昨今

の右傾化し排他的な風潮が広がる中、当時の人々の思いが遙かなものにされつつあると作者は言いたいのである。自身の名に込められた父の思いを題材に、平和への願いを改めて思い起こさせる歌である。

・ 毎日を小さな傷を舐めながら生きてゆくのだ君は野良猫

石井 雅子

昨今はあまり見かけなくなつたが、野良猫は飼猫と違って自由気儘である反面、危険と常に隣り合せて生きている。野性を失わない野良猫のような生き方に、どこか憧れる気持ちを抱く向きもあろう。ここで歌われている野良猫は、作者自身を投影したものともしめる。人間関係の軋轢などで傷つき、その傷を自ら癒しながら生きる、下旬の歯切れの良さは、そんな生き方へのエールでもある。

・ 方言と書いて居しが辞書引けば堂々とある（尻こそばゆい）

柏原 義清

「尻こそばゆい」は「きまりが悪くていたたまれなく思う」（明鏡国語辞典）とあり、用例として「そう褒められてはー」と書かれている。作者はなぜこの言葉に興味を湧いたのか。この次の歌に「わが生きに幾たび体験したかな思い出せない尻こそばゆさ」がある。いやいや思い出せないはずはない。作者は何度か体験したその尻こそばゆさを回想して、一人にんまりしているのだ。

・ 特注のコルセット付け寝ておりぬすっかり馴染み違和感あらず

近藤 光子

「入院の日々」とタイトルのある一連の中の一首。前回、圧迫骨折したとの歌があり、入院生活に入った作者である。コルセットを付けて、身動きの出来ない不自由な身体であるはずなのに、この歌に

は悲壮感がない。「特注のコルセット」が何やら自慢気であり、この発想の大方かさには頭が下がる。療養生活を続けながら、ひたすら身体の回復をはかっている作者を、応援したくなる歌である。

・ 大屋根リング歩きマレーシア館ひとつ観て花火見てわれの万博をはる

城 富貴美

「大屋根リング」とタイトルのある一連の中の一首。地元大阪に住む作者が思い立って、万博会場を訪れた顛末が歌われている。大勢の人で混雑する中、観られる限りの物は観て体力を使い果たしたが、この機会を逃せば再び観られるわけなし、よく頑張ったとの充足感に満ちている。訪れて良かったと、この後も思い返すだろう。

・ 十月の桜が受け身のように咲き忘れたくないことを忘れる

中村かよ子

桜は春に咲くものと思いきや、秋に咲いているのを見かけることがある。この歌、十月の桜は咲いてはいるが、春のように積極的に支持されないことを、憐れんだものか。ほんやりと咲くその寂しさは、人は忘れたくないことは忘れながら、忘れたことは忘れられない、愚かな生き物だということに通じたものと読んでみた。

・ 我が一人詠み書き絵描き昼を寝ねどきに仲間が来たりて唄ふ

和田 羊子

「庭の美術館」とタイトルのある一連の中の一首。一人住まいの作者が、影しい絵画等の保管場所として建てられた「庭の美術館」で、夏を風雅に過ごす様子が歌われている。作者の亡夫は香蘭の古い同人で、夫婦揃っての画家であった。夫が亡くなった後も遺された美術品等を管理しつつ、確かな暮らし方をされていることを頼もしく思う。

作品二、三 十首選



(二月号作品から)

高 島 憲 子 選

〈作品二〉

・お見合いの理想の男性問いたればじゃがいもの様な人と答えし娘

生田 綱代

じゃがいもの様な人、という比喻がとてもいい。お見合い、は聞かなくなつたイベントであるが、詠まれた時代は少し昔だろう。お年頃の娘さんの、当時の実話を回想したようだ。前の時代を知っている人には、わかる歌の内容。一生の伴侶にするなら、じゃがいものような人、と言つた娘さん。時代が変わつても、現代の読者は不変な何かを感じ、共感するのではないか。じゃがいもは地味な存在。でも、キッチンはどこかに保存されている常備野菜でもある。実際、煮つころがし、カレー、シチュー、みそ汁の具、ポテトサラダ、といった日常の献立に活躍する。料理次第といったところか。妻の操縦によつて、大活躍する夫像を想像し、楽しくなつた。

・愛されし「森のくまさん」歌詞のごと仲良くなれぬリアル切なし

田村 久美

まさに。熊被害のニュースが後を絶たない現代を詠んでいる。幼い子たちの愛誦歌を素材にしてシニカルである。童謡の世界では、愛らしい熊さんと少女が仲良く追いかけてっこをしている。まさかね。

現実には飢えた熊が殺人を犯しているというのに、このギャップ。リアル切なし、と主観を言い切っているが、かえって、そのシンプルさが爽快に思えた。

・朝顔と夕顔の花咲き継ぎてさしすせそつと囁き合えり

藤本佐知子

一読、言葉遊びの楽しさがある。さしすせそつと、がオノマトペの働きで朝顔と夕顔が咲き継ぐ様子をうまく表現した。どちらも、繊細な花。かそけさの極み。その咲き方を、やさしいサ行音を並べることで、イメージを読者に手渡ししてくる。連作で、〈取り得など何ひとつなき二人なりにぬねのんびり過ごすと決めた〉もあつた。声に出して読んでみる。谷川俊太郎の上質な詩を思い出した。

・集合に遅れる少年走りゆく七時三十分の朝の足音

三神 進

毎月の作品で、現在、闘病後の視力回復にとめる作者の背景がわかる。その背景を知らなくても、聴覚を鋭くしているのだ、ということが歌からうかがえる。難解な言葉もわかりづらさもなく、状況がよくわかる。七時三十分の朝の足音、とあることから、この少年はいつも遅れているのだろう、というミニドラマがある。作者のこの少年への温かな心寄せが伝わる。朝の足音、がよい。この作者にとつて、遅れる少年の足音も、朝の訪れ。作者にとつての〈朝の足音〉でもあろう。

・遺されし夫のコートのポケットにわれの知らざる絹のハンカチ

安田 恵子

この作者の詠む夫の挽歌に、いつも注目してしまう。この歌はま

た、視点に個性が出た。遺品のコートをクリックニングに出す場面、あるいは思い切った処分をするのだろうか、仔細は見えないけれど。生前には見る事なかった夫のポケット。そこから、妻である作者の知らない絹のハンカチが出てきた。こんな上等、誰からのプレゼントだったか。このようなハンカチを持って、どこへ出かけたのだろうか。妻の心に去来する様ざまな想いが、結句、絹のハンカチに想像されてくる。

・移植して五十年経し角膜は白内障の手術耐へ抜く

山下 絃正

五十年前に角膜移植を受けた作者。その時の角膜が、今は、白内障の手術に耐え抜いたという。半生の中の大きな出来事であったようだ。字余りでも、結句の〈耐へ抜く〉、に思いがこもる。七音でとのえて、〈に耐ふる〉、ともできようが、ここはどうしても、作者は耐へ抜く、と言いたかった。実感のこもる結句である。

〈作品三〉

・週二回玄関先に食材を置き配している平和な国あり

大里 友江

何とも、社会風刺のピリリと効いた一首。まさに、食材を置き配しても安全な国、日本。平和ボケ、と代表がよく言われている。平和な国あり、というおさめ方に批判精神がよく出た。同じ作者の〈萩の枝に夕べの雨が玉となり澄んだ空気を丸ごと映す〉も、印象深い。こちらは、叙景として優れている。多面的、意欲的に歌作りに挑戦している作者。家族詠にも温かな作品が多い。

・葉のとれし茎には蕾の白玉が白日のもとに晒されており

塩田 文字

茶の花を詠んだ連作。白日のもとに晒される、とは、主に、悪事、不正が公にされるときに用いられる慣用句。葉陰で見えないところにあった、茶の花のかわいい蕾。白玉、というのもよい。悪事とは真逆。それが、たまたま、見えたことへの表現として、この意外な取り合わせ。白玉のような蕾の恥じらうような風情が出た。この作者の思い切りのよさ。

・あかあかと燃えて盛れる曼殊沙華末枯れて立てば落ち武者のごと

中島由美子

前の歌が、静かな茶の花の蕾を詠んでいたが、こちらは、また、対照的な一首。曼殊沙華を、あかあかと燃え盛る、と表現するのは、ありがちであるが、下句の卓抜な比喻を生かすための序詞のよさで、かえって効果的と見た。咲き盛っていた真つ赤なそれが、末枯れて(すがれて)立っている様子を、落ち武者にたとえたところに眼目がある。比喻もこのくらい個性があると、成功する。

・身ぶるいをしては重ね着する朝に朝顔の実の弾けていたり

古澤 正道

あの酷暑が過ぎてみると、昨年の秋には、まさに上句のような朝があつたなあと、再び感慨がよみがえる。夏から一気に、秋冬が同時に来たようだ。まだ、夏の名残の朝顔の実が弾けだした頃だというのに、という作者の嘆息が聞こえてくる。この作者は〈博多湾の能古島の眼下に漁船らが円を描きて綱を引きおり〉という、端正な叙景も詠む。景を描写することも、掲出のような身近な些事を詠むことも、基本は一緒であるなど再認識させられた。

村野次郎への旅（191）

昭和期の「香蘭」（二十六）

千々と久幸

今月から「香蘭」第六卷第二號、昭和三年（1928）二月号を読むことにする。表紙畫裏及題字の森田恒友、編輯兼発行者田中次郎に変わりはなぬ。誌面は総頁76頁、裏表紙は白珠社刊の植草芳子歌集『雲に入る鳥』の廣告が1頁。

「歌人の超然的態度の可否」は既に見て来たので、短歌欄から覗いていこう。

第一同人の短歌は村野次郎、橋本敏夫、本間樂寛、南部松若丸、芥子澤新之介、眞島勝郎、石野正太郎、今井嘉雄、杉浦翠子の9名。繼いで第二同人は成田憲三、西村孝、松丸魁一郎、日根淳吉、若林昇、鈴木瑛、庚申薫、久米蒼月、大内則夫、木賊谷太郎、大貫迪子の11名。

巻頭は村野先生の作品五首である。

血潮

村野次郎

①見守りつつ静かに居れば血をあびし大きこころのわれにもわかる（大隈會館を訪ひ候遭難の遺物を拝観す）

②目の前の染みしツボンは若かりしかのからだより飛びし血潮か

③街中にたたずみとづる眼底に黒き血潮の見えるて消えたる

④のむ水のみどに沁むるこの冬のさびしさ堪えて生さとほしたる（川村浩碧を見舞う）

⑤旅さきよりいまし歸りてうれしもよわが家の屋根も日に照れり見ゆ

①③は社会的にはよく知られた大隈重信外務大臣の遭難を回想したものである。村野先生の母校でもあり、少し長いが『早稲田大学百年史』から関連箇所を抜いておく。

明治22年10月18日夜、当日は閣議があつた

ので（大隈侯は）これに列席し、午後4時5分頃、首相官邸を出て馬車を利用して霞ヶ関の外務省に向かつた。馬車が外務省の門を過ぎようとした頃、フロックコートを着た三十歳ぐらいの男が足早に車に近づいてきたので、怪しと見た駭者は馬に一鞭あて、車を反転して門前の下水橋に差し掛かつた。ちょうどこの時1、5メートルぐらいの距離に迫つた件の男は、手に持つた包みを馬車の真上に投げつけた。

途端に一大爆音が地上を震動させ、馬車の一部はかなりの損傷を受けたが、からくも難を逃れて門内深く姿を消した。この爆音を聞きつけた護衛の警部は、直ちに馬車から飛び降りてその男を追つたが、彼はこと成りと考へたか、矢庭に懐中から白刃を取り出し、咽喉に突き立て、朱に染まつて路上に倒れた。

一方の大隈もまた血に染まりながら、玄關の一室にかつぎ込まれた。偶然この時外務省門前を通り掛かつた高本兼寛海軍医総監は、変事と見て省内に駆け込み、大隈の遭難を目の当たりに見ることが出来た。一方凶変に接した関係者達は、直ちに佐藤医師、帝国大学のベルツ博士、その他伊東、岩佐、池田三侍

医を招き診察した結果、右足の膝関節以下が砕け、その上部辺りから切断しなければならなかった。

手術は午後7時55分に始まり、8時37分に終わったというが、時間的には40分間、これほどの大手術を短時間で完了できたのは、さすがが当時一流の国手達の手腕によるものと敬服せざるを得ない。なお、切断された足は現在も日赤に保存されている。

被爆の時、唯一声「馬鹿っ」と大喝した大隈は、顔色も変えずに自ら車から降りようとして叶わず、漸くに広間に運ばれたが、逸早く駆けつけた加藤高明秘書官の手を握った時、加藤はその握力に驚いたという。日頃生死を国家に託した大隈は、これぐらいの事では微動だにしなかった。

その政治家としての信念の偉大さを改めて感じさせられるではないか。

書き写しながら、政治家の凶事は優に一編のドラマになることを知らされた。ドラマとしても読み物としても、いささかの演出臭はあってもこうでなければ読者は承知しまい、とも思ったことだった。

村野先生の①③の作品はイマジネーションの所産だが、相手が現実の出来ごとなら、後追いが精一杯だろう。

さて少しく迂回した感じになったが、④は見舞いの歌である。詞書が付されているが、どの程度の交流であったのかはこの一首だけでははつきりしない。またそこが自宅であったのか入院先であったのかも知れない。しかし病者の身の上に「冬のさびしさ」を見たのは先生の感性であり、友情である。

先生の歌は今月は五首、前に書いたが寡作というのはちと淋しい。

前月歌壇合評を見ておこう。評者は芥子澤新之介、杉浦翠子、筏井嘉一、冬野木枯

撒攪

八丈島出航

夕風の灣に鳴らせるわが船の汽笛のこだま
三つに五つ

嘆米歌安値歌

支拂の金にあつべき安値米けふも傾きつつ
たのしみかたし

吉植庄亮

(新之介) 私にはまだ人のお歌の批評は出来ません。またする柄でもありませんがいひ付けられたから責だけを果します。第一「夕風の灣に鳴らせるわが汽笛」まではすらすらと來、また作者のお心持にも同感出來ます。が、「三つ五つに」に至つて急にそれ迄の感じとは方向の變つたものが出て來た氣がします。後の歌にあるなつかしい味、私はこういう歌が好きです。ただ安値米とあるところの此の場合も一工夫あるとなほよからうと思ひます。

(翠子) (一)のお歌をどうしてこれを吉植さんのお歌だと思はれませう。「草原」の中には中々良いものがあるのに、こんなものを發表して下さいませぬ。「こだま」の響は全々死んでゐます。あのブーブといふ音を説明したのでせうが、實にくだらなくて、子どものいふところですよ。私が常に推選してゐる、岡田實氏の「こだま」の歌をどうか香蘭一月號でこらんください。今日の青年はあの位心境的に「反響」を扱つて居ります。「おもおもとかへり」とか「ひゞきてかへるもまこと足音」などといつてゐる氏の歌を見て下さい。(二)のお歌もどうしても概念的ですよ。

続・酔風船 (27)

千々和 久幸

流行り歌に励まされて

わたしが流行り歌を意識したのは小学校5年生の時である。学芸会があつて友人四、五人と肩を組んで「あなたと二人で来た丘」を歌つたら、途端に担任の教師から「やめろ、止めろ。流行歌は止めろ」と一喝された。

この歌は東辰三作詩・作曲の「港が見える丘」(昭和22)で、出だしは「あなたと二人で来た丘は／港が見える丘／色褪せた桜唯一つ／淋しく咲いていた、である。今に思えば横浜港を見下ろす小高い丘にある、かの有名な公園である。

中学生になると、もう美空ひばり一辺倒になった。だが津村謙の「上海帰りのリル」(昭26)が大流行で「リル、リル」とみな歌つた。ある日、授業の終わった隣のクラスの仲間が、その歌を歌いながら教室の傍の廊下を通りかかった。と、国語の教諭が「おい、ちょっと来い」と件の学生を呼び止め、「おい、何が面白いじゃない!」かと叱りつけ、教室は爆笑の渦と化した。一番の歌詞は「あまいい切ない／思い出だけを／胸にたくって 探して歩く」である。

高校に入学した直後は江利チエミの「テネシーワルツ」が大流行りだった。登校して授業の始まる前に数名が教室で歌っていたら、

見回りに来た歴史の教諭に、「俗曲は止めろ」と怒鳴られた。「へえーっ、これって俗曲かよ」と変に感心した覚えがある。

この歌、チエミが進駐軍のキャンプ回りの折に兵士からブレゼントされたレコードからの歌で、和田寿三の訳詞。歌い出しは、さりしに夢／あのテネシー・ワルツ／なつかし愛の唄、だがチエミはこの歌詞を英語と日本語のチャンポンで歌って人気を博した。

大学に入った当初、どこか文系のクラブに入部したい(中、高はずっと体育系の野球部だったから)と思い、哲学研究会を覗いたら黒板に「嬉しがらせて 泣かせて消えた／憎いあの夜の旅の風」と板書されていた。へえ、哲研は随分粋な学生がいるもんだな、と思つた瞬間、なんだこりゃ三橋美智也「おんな船頭唄」じゃないか、と笑ってしまった。

わたしと流行歌の繋がりを学生時代を中心に見てきたが、わたしが語りたいのは実は、昭和初期から戦前までの流行歌である。極論すればわたしの思い出は流行歌と共にあつた、と言えよう。しかし残念ながら流行歌は所謂クラシック(洋楽)に比べて評価が低い。流行歌を時代と風俗に重ねて語れるのは、作家の五木寛之、作詞家の阿久悠、宗教学者の山折哲雄くらいのものである。その山折は「短歌の抒情、演歌の感傷」と言つた。同感である。流行歌がセンチメンタリズムの所産であることは間違いない。

わたしは小学生の頃に「サーカスの唄」(昭8、西條八十詞、古賀政男曲)や「緑の地平線」(昭10、佐藤惣之助詞、古賀政男曲)を聞き覚えて歌つた。別段、自慢するほどのことでもないが、わたしは短歌を詠み現代詩を書きエッセイを書く。何処までがセンチメンタリズムの所産か、自分の事となると見分けがつかなくなる。

一頁公論

(58)

思い出の旅

相川 公子

・キタローの「シルクロード」でストレッチ
砂漠の猛暑思ひ出しつつ

金曜日の体操教室は、この曲に合わせての
ストレッチから始まる。この曲を聞くと真昼
の砂漠のあの暑さがありありと蘇って来る。

西安をバスで出発し、砂漠に作られた一本
だけの道を遺跡を見つつオアシス伝いに行く
旅であった。

この度思いがけず、故西澤先生の歌集『海
に向く』を讀ませていただき、その中にゴビ
砂漠と敦煌を詠んだ三十五首を見つけ、先生
も砂漠に魅せられていたことを知り嬉しく
なった。

・創生のままの砂漠を今し踏む人為ばかりに
馴れし蹠あづらに

西澤みつぎ

あの旅の一番の感動は、先生の歌の通り創
生のままの砂漠を自分の足で踏むことが出来
たことであつたと思う。

朝、宿泊施設をバスで出発し、炎暑の道を
たどつて来た後に見る日没は感動であつた。

・息詰めて見終えしゴビの落日を言う誰もな
し返す蹠あづらに

西澤みつぎ

インドを目指した玄奘が往路で滞在したと
伝えられる高昌園の遺跡は、人気のない真昼
の砂漠に所どころに崩れ残つた城壁を残して
有つた。

・興亡の歴史をひそと語りごと遺跡に小さき
つむじ風生る

立ち寄つた小さなオアシスでは貴重な水を
使つてお茶をふるまわれた。燂ひびの入つた茶碗
の汚れが気になつたが、それは水の豊かな国
に住む者の思うことだと反省した。

・貴重なる水を使ひて茶をくれるオアシス人
の心やさしき

オアシスの人達は控え目で西安に住む人と
は少し違つて見えた。オアシスの人を詠んだ
心ひかれる先生の歌がある。

・追求も疑問もついぞなき顔に砂漠の人のい
とおしく老ゆ

西澤みつぎ

ホータンでは玉探たまぐさしを楽しんだ。ホータン
川の川原には玉たまを探す現地の人々の姿もちらほ
ら見えた。見付けた玉たまをバザールの鑑定人の
所に持ち込んでいる男達の姿に、砂漠を来て
何日ぶりかで人間の欲望を見る気がした。

・終着地カシユガルは大きな町で、ホテルも、
整備されたバザールもあつた。ホテルに荷物
を置いての町歩きでは、思いがけない楽しい
事があつた。

庭にいた老婦人に手真似で招き入れられ、
おいしい葡萄をごちそうになつた。

夕暮れの町で私にキャンディをねだつた愛
らしいウイグルの幼児は、二十余年を経た今、
どんな若者になつてゐるだらうかと思つてい
る。

・夕暮れの町で会ひたるあの男の子健やかな
るを願ひつつある